

総 説

AIDS GOES ON—エイズ対策史へのひとつの視点

AIDS GOES ON—A Personal View for the Global AIDS Responses

宮 田 一 雄

Kazuo MIYATA

産経新聞特別記者

Senior Staff Writer, The SANKEI SHINBUN

国連合同エイズ計画（UNAIDS）の初代事務局長として長く世界のエイズ対策を推進してきたロンドン大学熱帯医学大学院のピーター・ピオット学長は近著『NO TIME TO LOSE』の最終章で次のように書いている。

《私たちは大きな成果を上げてきたが、それでもエイズの終わりが見えてきたわけではない》¹⁾

米国が22年ぶりにホスト国となり、ワシントンDCで開催された昨年7月の第19回国際エイズ会議（AIDS2012）では「エイズの終わりの始まり」がスローガンのように繰り返されたという。だが、ピオット氏の認識はそれとは大きく異なっている。むしろ、2012年世界エイズデーにおける日本の国内啓発キャンペーンのテーマ《AIDS GOES ON—エイズは続いている》²⁾のほうが近い。

米疾病予防管理センター（CDC）の死亡疾病週報（MMWR）は1981年6月5日、カリフォルニアのゲイ男性5人の肺炎症例を報告した。エイズの最初の公式症例とされるこの報告をHIV/エイズの世界的大流行（パンデミック）の起点として位置づければ、人類はすでに31年半の長きにわたるエイズとの闘いを経験し、いまなおピオット氏が《終わりが見えてきたわけではない》と指摘する困難な現実に向き合っている。

たまたま厚生省担当の社会部記者だったことから、私がエイズ取材を始めるようになったのは1986年の暮のことだった。先ほどの流行開始から5年半が経過していたが、それでも比較的、初期段階だったのではないかと思う。振り返ると、あまり華々しくも輝かしくもなく、細々と続けてきた取材もいつの間にか四半世紀を超えた。エイズ対策史の全貌などというものを一介の新聞記者が伝えることは到底できないにしても、その素材の一部くらいは提供できるかもしれない。そんな思いもある。本稿では私的な体験も含め、ささやかな報告を試みることにしたい。

著者連絡先：宮田一雄（〒100-8077 東京都千代田区大手町1-7-2 産経新聞編集局）

2013年1月7日受付

1. 深い闇の中で—1994年夏

地元テレビの街頭インタビューに答え、黒いサングラスの男性が怒りを含んだ口調でこう語っていた。

「エイズ25周年になったら、また集まりますか」

1994年6月26日、ニューヨークのマンハッタンではストーンウォール暴動25周年を記念する大規模な行進が行われた。国連本部前からセントラルパークの広場まで、距離にすればせいぜい5キロ程度の行程だったが、あまりにも参加者が多かったため、ミッドタウンの目抜き通りでは、朝から始まった行進が午後4時を過ぎてもまだ続いていた。ニューヨークだけでなく、全米、全世界から同性愛者の権利を求める活動家やその支援者、エイズアクティビストといった人たちが続々と集まったからだ。

沿道で声援を送った人も含め、行進には110万人が参加したと主催者は発表した³⁾。この手の主催者発表は過大になる傾向が強いが、現場で取材をした印象では110万人もそれほど実態とはかけ離れているようには思えなかった。

行進の様子は当日、短い新聞記事にまとめて報道したほかに、「石の壁の夏」という詩にも書き残してある。あの現場の雰囲気伝えるにはどうしたらいいのか。発表する媒体のあてもなくそんなことを考え、それが詩のかたちにとまとめたのは1年ほど後のことだ。

「石の壁の夏」

ようこそニューヨークへ
テレビカメラに向かって
サングラスの男がいった
石の壁と呼ばれるビレッジのバーで
女装のクイーンが
制服警官の向こうずねを
思い切り蹴っ飛ばしてから
25年が過ぎていた

ようこそニューヨークへ
世界の首都へ
6月の空は青く晴れ渡り
地上では
男たちが胸の筋肉を盛り上げ
女たちもTシャツを脱いで
日に焼けた乳房を誇示しながら
石の壁を通り過ぎていく
男と男、女と女
そして時には男と女
クリストファー通りの
歩道を埋める人の波の中で
わっ、スーパーに入ったみたい
目移りがする
と僕の友人は声を弾ませた
この町で最も尊敬されない存在である
ヘテロセクシュアル日本人すけべおじさん
と化してしまった僕には
単なる上半身裸の男の人ごみにしか
見えなかったけれど
花の飾られたアパートの窓という窓から
虹の色の旗が6月の風になびくと
心はやはり浮き立たずにはいられない

ようこそニューヨークへ
ストーンウォール暴動25周年
日本からきた若者たちは
カタカタと下駄を踏み鳴らして
国連からセントラルパークまで
主催者発表110万人の
ゲイとレズビアンへの行進に加わり
僕はつかず離れず
慎重に距離をはかりながら
6月の光の中を歩いた
ファッション技術大学では
同性愛者の世界会議が開かれ
日本からの出席者が
同じ年の8月
横浜で開かれるエイズ会議への
参加を呼びかけた
五輪メダリストのルゲイニス選手は
ゲイであることを公表したけれど
HIVに感染していることは黙っていたので
くるりと一回転すると
小さな水しぶきをあげて
記憶の底に消えていった

ようこそニューヨークへ
1994年6月26日
だれもが心浮き立つ夏の日
テレビカメラに向かって
サングラスの男がいった
エイズ25周年に
また集まりますか

1969年6月、グリニッチビレッジにあったゲイバー「ストーンウォール・イン」にニューヨーク市警の手入れが入ったことをきっかけに3日間にわたって群衆と警察との衝突が続いた。ゲイバーに対する手入れはそれまでも何度も行われていたが、その日はたまたまゲイコミュニティに人気の高かった大女優ジュディ・ガーランドのお通夜があったので、「なにもこんな日に」と怒りに火がついてしまったようだ。

同性愛者が自らの権利を主張する最初の大きな動きとして歴史に残るこのストーンウォール暴動の25周年の節目が1994年だった。行進が主催者発表110万人にまで盛り上がったのは、米国のゲイコミュニティが当時、エイズの流行という大きな危機に直面していたからであり、それは同時にニューヨークという大都市が抱える最大の課題でもあった。私も取材で57丁目あたりから行進に加わり、あまりにも多くの人に参加しているのに驚くと同時にエイズの流行の深刻さを改めて認識する思いだった。

「エイズ25周年にまた集まりますか」とテレビのインタビューに答えていた男性は、実は私も少しだけ面識があるエイズアクティビストだった。1981年から数えると当時はエイズ13周年。抗レトロウイルス薬の多剤併用療法の効果などはまだ、発表されておらず、単剤の投与では薬剤耐性ができて結局、効果は期待できないことがはっきりして治療に希望を失いつつある時期でもあった。

長く困難なエイズ対策に疲弊し、コンパッションファティーグ（同情疲れ）が指摘されるなかで、HIV/エイズとの闘いを初期段階から担ってきた指導者たちの多くがエイズを発症し、激しい衰弱とともに亡くなっていく。エイズ25周年にあたる2006年は12年も先であり、その頃にはもう俺たちは誰も生きていないだろう。ストーンウォール25周年の行進に参加したHIV陽性者の多くが心の奥ではそう考えていたはずだ。

「また集まりますか」というひと言には、そのような背景を踏まえた強烈な怒りが含まれていた。

2. 横浜会議からGIPA宣言へ

いま振り返れば、そうした絶望的な気分が広がっていたこととも大きく関係していたと思うのだが、世界がHIV/エ

イズのパンデミックと闘う準備を着々と整えていったという意味でも1994年は節目の年だったといえる。エイズ対策年表(表1)を作成したので、流れを把握していただければ幸いです。

1994年6月のストーンウォール暴動25周年に続き、7月には国連経済社会理事会が世界保健機関(WHO)、国連開発計画(UNDP)、国連児童基金(UNICEF)、国連人口基金(UNFPA)、国連教育科学文化機関(UNESCO)、世界銀行(WB)の6機関による「国連エイズ共同プログラム」設立に向けた推進決議を採択している。国連担当の記者仲間の間でもほとんど注目されることのない決議であり、それを報じるような物好きはひょっとすると世界中で私だけ

だったのかもしれないが、産経新聞の紙面の片隅には小さな記事が掲載されている⁴⁾。この決議が実は翌1995年のUNAIDS創設、および1年間の助走期間を経た1996年1月からの正式活動開始につながる国連の大きな政治的決断だったことは、記事を書いた私にも想像すらできなかった。歴史が動くときというのは往々にしてそんなものなのだろう。

官僚組織の通弊として、国連もまたさまざまな専門領域の機関が縦割りで任務の遂行にあたる傾向が強く、現場では重複や混乱、無駄、手柄の取合いなどが指摘される場面がしばしばあったし、現在もある。そうした弊害を克服するために、最近では「deliver as one(一貫性を持った支援)」

表1 世界のエイズ対策年表

1981年 6月	米疾病予防管理センター(CDC)の死亡疾病週報で最初の症例報告
1982年 7月	AIDSと命名
1983年 5月	原因ウイルスを分離の論文(後にHIVと命名)
1985年 10月	ロック・ハドソンがエイズで死去
1987年 3月	エイズ治療薬としてAZTが米国で初承認
1988年 1月	エイズ対策世界保健大臣会議(ロンドン)
12月	第1回世界エイズデー
1991年 11月	マジック・ジョンソンがHIV感染公表
1994年 6月	ストーンウォール25周年
7月	「国連エイズ共同プログラム」推進決議
8月	横浜で第10回エイズ国際会議
12月	パリ・エイズサミット(GIPA原則)
1996年 1月	国連合同エイズ計画(UNAIDS)活動開始 多剤併用療法の効果報告
6月	ミュージカル「レント」トニー賞
2000年 7月	第13回国際エイズ会議(南ア・ダーバン) 九州沖縄サミット 沖縄感染症イニシアティブ
9月	国連ミレニアムサミット ミレニアム開発目標
2001年 6月	国連エイズ特別総会 コミットメント宣言 締め切りのついた約束
2002年 1月	世界エイズ・結核・マラリア対策基金発足
2003年 1月	米大統領エイズ救済緊急計画(PEPFAR)、5年で150億ドル拠出
12月	3by5プログラム発進
2004年 7月	第15回国際エイズ会議(バンコク)「約束よりも実行を」
2005年 7月	神戸で第7回アジア太平洋地域エイズ国際会議 グレンイーグルス・サミット ユニバーサルアクセス
2006年 6月	国連エイズ対策レビュー総会 政治宣言
2007年 11月	UNAIDS, WHOの新推計 大幅下方修正
2009年 10月	オバマ米大統領がHIV陽性者に対する米国の入国規制撤廃を発表
2010年 7月	第18回国際エイズ会議で薬物政策の変更を求めるウィーン宣言採択
2011年 6月	エイズ流行30周年 ニューヨークの国連本部で国連エイズ特別総会ハイレベル会合
2012年 7月	第19回国際エイズ会議「力を合わせて流れを変えよう」

の必要性が指摘されているが、UNAIDSはその最も先進的な試みでもあった。

現在は上記6機関に国際労働機関（ILO）、世界食糧計画（WFP）、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）、国連薬物犯罪事務所（UNODC）、国連女性機関（UN Women）を加えた11機関がUNAIDSの共同スポンサーになっている⁵⁾。その「deliver as one」が実は苦勞の連続であることもまた、14年にわたってUNAIDS事務局長を務めたピオット氏の著書には詳しく書かれている。

1994年8月7日には横浜で第10回国際エイズ会議が開幕している。8月11日まで5日間にわたって開かれた横浜会議は、それまでヨーロッパと北米大陸で交互に開かれていた国際エイズ会議が初めてアジアで開催され、わが国のエイズ対策に大きな影響を与えただけでなく、世界のエイズ対策史から見ても重要な位置を占める会議だった。

HIV陽性者やエイズの流行に大きな影響を受けているコミュニティの積極的な参加を促し、そうしたコミュニティ当事者の参加がなければ国際エイズ会議は開けない。1989年にモンテリオールで開かれた第5回国際エイズ会議の閉会式でドン・デュガニエ氏がHIV陽性者として初めて公式に演説を行って以来、年を追うごとに重視されていったその考え方を主催者の意思として明確に示した会議でもあったからだ。

会議の組織委員会には事務局と同格の組織としてHIV陽性者やNGO/NPOの参加促進窓口となるコミュニティリエゾン委員会が設けられ、厚生省のバックアップを受けたその委員会のトップには「ぶれいす東京」の池上千寿子代表が就任した。純粹にサイエンティフィックな医学の学会を開きたいなどといったわが国医療界の了見違いに直面しつつ、池上さんらを支えて何とか会議の成り立ちをまっとうなものに変えていった立役者の一人も、当時は国際エイズ学会（IAS）の理事長だったピーター・ピオット氏である。

その年の12月1日にパリで開かれるエイズサミットの基本理念がしっかりと方向付けられたという意味でも、横浜会議は重要だ。フランスからはシモーヌ・ベイユ社会問題・保健・都市相が会議に参加し、最終日に会場で記者会見を行ってエイズサミットへの協力を呼びかけている。

国連の世界的なエイズ戦略再構築の動きとエイズサミットの共同宣言で打ち出されたGIPA（Greater Involvement of People Living with or Affected by HIV/AIDS、当事者の積極的関与）の原則をつなぐ、サッカーで言えば中盤のミッドフィルダーのような役割を横浜会議は担うことになった。

パリ・エイズサミットは、政治の指導者が集まるHIV/エイズ分野の会議としては1988年1月にロンドンで開かれたエイズ対策世界保健大臣会議以来、6年半ぶりの会議だった。日本を含む42カ国の政府代表が参加し、わが国

からは閣僚の参加こそなかったものの民間からHIV陽性者1人と陽性者支援のNGOの代表1人が政府代表団に加わっていた。GIPA原則の観点からもこの点には注目しておきたい。

HIV/エイズ分野では1981年の流行開始以来、ロンドン会議（1988年1月）、パリ・エイズサミット（1994年12月）、国連エイズ特別総会（2001年6月）と6年半から7年おきに世界の政治指導者が集まる大会議が開かれている。このことはエイズ予防財団編『新エイズ予防指針と私たち』（連合出版）で背景も含めて紹介してあるので、ここでは重複を避けるが、手短かに言えば、エイズ流行の最初の20年間はパンデミックへの対応が後手、後手に回り、政治の指導者が6年半程度の周期で大規模な国際的会議を開いては状況の後追いを続ける時代だった。

パリ共同宣言⁶⁾に盛り込まれた当時のGIPAは努力目標的な印象だったが、しだいに各国が果たすべき明確な原則として重視されるようになっていった。参考までに2007年にUNAIDSがまとめた「POLCY BRIEF」の内容を要約して紹介しよう（表2）。

GIPAにはHIV陽性者に加え、HIV/エイズの流行に大きな影響を受けているコミュニティの当事者も対象に含まれ、各国それぞれの流行状況にあわせて適切かつ有効な対応をとれるようにする幅の広い概念となっている。

3. エイズの時代の3つの詩

横浜で第10回国際エイズ会議が開かれた当時、私はニューヨークにいたので会議そのものを取材することはできなかった。ただし、横浜から帰ってきたACT UP NY⁷⁾のメンバーに「横浜、どうだった」と尋ねたところ、「いい会議だったぞ。心配するな」となかなか反応が良く、ほっとしたことを覚えている。

抗レトロウイルス薬の多剤併用療法の高い延命効果が米国内で報告されるようになるのは1996年1月以降で、それ以前の1994、1995年あたりは、治療に関してはかなり見通しの暗いニュースしか伝わってこなかった。だからこそ、社会的なエイズアクティビズム、とりわけHIV/エイズにまつわる差別や偏見と闘い、一方で予防情報の提供や治療研究の充実を求める政治行動はニューヨークでも切ないほどの切迫感、およびそれとは裏腹の徒勞感を抱えながら続けられていた。米国大都市圏のゲイコミュニティで1980年代エイズアクティビズムを切り開いてきた人たちの多くがこの時期に亡くなり、コミュニティ全体に暗い影を落としていたからだ。

私はその様子をそばにいて目撃し、控えめに報道する程度の傍観者の日本人記者だったが、1995年の年が明けて間もないある夜、自宅のあったニューヨーク市クイーンズ

表 2 GIPA 原則 (UNAIDS POLICY BRIEF から要約)

◇基本的考え方

- ・ HIV 陽性者は、他の陽性者の相談に応じたり、政策決定の際に陽性者のニーズを表明したりするのに適していることが多い。
- ・ HIV 陽性者の権利を実現し、陽性者自身が責任を果たすために必要。
- ・ (感染していない)「サービス提供者」と「サービス受益者」(としての HIV 陽性者) という誤った前提を打破する。
- ・ 予防、治療、ケア、支援の普遍的アクセス達成には陽性者の関与がますます重要。

◇ HIV 陽性者の権利 他の人と同様の人権が保障されなければならない。

- 適切なサービスを受ける権利
- ジェンダーの平等
- 自己決定および自らの生活の質に影響を与える決定過程への参加
- 差別を免れる権利

◇経緯

- 1983 米国エイズ会議 (デンバー) HIV 陽性者の体験はエイズ対策に反映しうるし、反映すべきでもあるとの考え方を初めて公式に表明。
- 1994 パリ・エイズサミット 参加 42 国が GIPA は倫理的にも各国のエイズ対策の効果の観点からも重要であると宣言。
- 2001 国連エイズ特別総会 加盟 189 国がコミットメント宣言で GIPA 原則を支持。
- 2006 国連エイズ対策レビュー総会 加盟 192 国が政治宣言で GIPA 原則支持を確認。

◇ GIPA がもたらす利益

- 個人レベル 自らを肯定的に受け入れ、孤立感や気分の落ち込みを防ぐ。ケアや予防関連の情報が得やすくなり、健康の改善をはかれる。
- 組織レベル HIV 陽性者の参加で、貴重な経験と知識を共有できる。
- 社会レベル HIV 陽性者が社会に貢献するメンバーであることを示し、恐怖や偏見を除去。陽性者への根拠のない思い込みや誤解を粉砕する。

◇ GIPA の課題

- ・ HIV 陽性者組織の管理能力不足、技術レベル、資金の制約。
- ・ いつ、だれに、どのように感染を明らかにするかを判断するための支援。
- ・ 感染の公表が同性愛者であることや人種に関する偏見を拡大するリスク (GIPA は個人の感染公表を要求するわけではない。「見えない=参加できない」という意味ではない)。
- ・ 多様な HIV 陽性者を代表することの難しさ。
- ・ 治療、ケア、支援へのアクセスや生活保護など生存の基本条件の確保に労力を費やすことが陽性者団体やネットワークへの参加を阻む。
- ・ 貧困やジェンダーの不均衡、ホモフォビアなど偏見に基づく社会的障壁の存在。
- ・ 家族、友人、社会からの拒絶、保健医療機関、職場、学校での差別。

^{注)} 原文は http://www.unaids.org/en/media/unaids/contentassets/dataimport/pub/briefingnote/2007/jc1299_policy_brief_gipa.pdf

区の長屋でシャワーを浴びているときに突然、詩を書こうという思いがわき上がってきた。なぜかは分からない。だが、輝かしくも困難なエイズの時代、エイズという病気の流行と闘う人たちが確実に存在している時代を伝えるには、新聞記事や論文では書ききれない何かを表現する手段もまた、必要ではないかと思ってしまったのだ。宮田さんの詩はなんだか新聞記事みたいだねと冷たくもまた、過酷に評価する優しい友人にもたくさん恵まれたが、それでも私には必要だった。そのごく一部を背景説明とともに紹介したい。

「1 勇者はいない」

いつだったのか
どこからだったのか

僕らはそっと闘い始めた
武器はいらないよ
午後の散歩道を歩くように
ゆるやかに闘いは始まった
僕らはいがみあった
無視もした
傷つき
傷つけ
毒づき
なだめ
僕らが誰で
敵が誰か
それすらも分からず

勝利なき闘いは
いまも続く

英雄はいない
勇者もいない
誰もが一度は向き合うものに
向かって
笑ってみたり
怒ってみたり
愛することと
憎むこと
忘れることさえもが
僕らを支え
いつかきっと闘いは終わるよ

どうしようか
そのときには
どうしようか
抱き合って
泣いて笑って
僕らは闘ったんだよ
僕らのいやしさも
こずるさも
せこい計算も
愛も打算も
すべてを使って
闘ったんだよ
と言ってみようか
でも多分
それを心配するのは
後から来る者たちの
仕事になるはずだ

敵は誰なのか
ウイルスか
システムか
貧しい社会か
打たれ強い官僚か
聞き分けのない新聞記者か
善意か恐怖かコンドームか
正しい知識か
敵は外からは来ない
正しい知識は
正しくない
僕らが敵に回しているのは
敵がいなければ闘えないような
そのような相手なのだろうか

いつだって
どこからだって
始めるのに
遅すぎることはない
敵を求めず
正義もいらず
ゆるやかに
感動したり
落胆したり
僕らは
僕らのために

パリ・エイズサミットで GIPA 原則が高らかに宣言されたとはいえ、それがただちに実行に移されたのかというと、もちろん世の中はそう簡単にはいかない。たとえば、HIV 陽性者とともに GIPA の対象となる「HIV 感染の高いリスクにさらされている人たち」とは具体的にどんな人たちなのか。男性と性行為をする男性 (MSM)、薬物注射使用者、セックスワーカー、移住労働者、難民・避難民、若者、女性。いくつかの集団に関しては、存在そのものが社会的、法的に受け入れられていない国もある。一応、受け入れてはいても政策決定への参画はちょっと、という国もある。打たれ強い官僚や聞き分けのない新聞記者がたくさんいる国は、わざわざ海外に出かけなくても見つけられそうだ。

敵は誰なのか。1990 年代は冷戦構造が崩壊し、善と悪との闘いといった二元論的な世界観を考え直してみる必要があると多くの人を感じる 10 年でもあった。その 90 年代の半ば、いくぶん稚拙ではあったが、この詩から私の新聞記者としての詩作はスタートした。

ひょっとすると 21 世紀の最初の 10 年あるいは 15 年は、敵をもう一度、無理やりにでも探し、それで何とか安心したいという時期なのかもしれない。誰と、そして何と闘っているのか。それがはっきりしない状態が続くのは人間にとって結構つらいからだ。

エイズ対策といえば「撲滅」、そうした発想への違和感 は 1990 年代の初めからあったのだが、それでもなお日本社会の中には「撲滅」に飛びつきたくなるような病弊が延々と残り続けているようにも思う。

「2 握手をする一部の人の人」

撲り
滅ぼすべき
存在であること
一部の人の人であること
罪もない犠牲者の

外側に位置すること
進んで社会に
協力すべきこと
世紀末
世も末

見上げても見上げても
涙があふれてくるから
じっと空を見る
病院からきた手紙には
そう書かれていた
さびしくて
不器用に世慣れていたから
ひと旗あげようと思った
罪もなくじゃなく
犠牲者なんかでもなく
いつもだれかが
そばにいてほしかった
だれでもよかったんだけど

HIV は
蚊ではうつりません
食事をしてもうつりません
握手やキスではうつりません
プールやお風呂に入っても
大丈夫
では握手をしてください
はい
あなたと握手をするために
私がいるわけではないけれど
まあいいや

さようなら
一緒に
食事をして
撲り
減ほすべき
握手をする
一部の
人々

エイズの原因となる HIV に感染した人は、飛躍的な医学の進歩がないかぎり、生涯にわたってそのウイルスを抱えて生きていくことになる。そうした状況のもとで「撲滅」は何を意味するのか。撲り減ほされるのはウイルスなのか、それともウイルスに感染した人なのか。

病院からの手紙の送り主は、その手紙から 1 年 10 カ月

後の 1992 年 10 月、自らの HIV 感染を公表し、かなり話題になった。取り巻きの著名人とされる人々がお膳立てしたそのお披露目のパーティが都内のホテルで開かれたことがある。感染発表の記者会見も兼ね、会場を訪れた新聞記者やテレビクルーからは取材料を徴収していた。感染を公表した人にはそれなりの覚悟があり、あえて取り巻きの動きに乗ったのではないかと思う。私は事前に本人から「どう思う」と聞かれ、「やめたら」と答えたことがあるが、それは少々、僭越な忠告だったのかもしれない。

パーティ会場の片隅で、彼は「来てくれたんですね」と、ばつの悪そうな笑顔を見せ、グラスを手にしたまま傍らの椅子に座った。かなり長い時間、立ちっ放しだったようだ。

下を向いて座っていた彼の前に一人の若者が近づき、「あっ、あの」と声をかけた。彼が「はい」と答えると、若者は「すいません。握手をしてください」と右手を差し出す。

彼はしばらく当惑したような表情を浮かべ、それから「いいですよ」と若者の右手を握りしめた。たったそれだけのことだったが、私はそのとき、彼が深い失意の表情を浮かべたように感じた。事実はそのようなことではまったくなく、私が単にそうした感情を彼の表情から読み取りたいと思っただけのことなのかもしれない。

「3 前向きであろうと、なかろうと」

前向きであろうと、なかろうと
私には毎日の生活がある
食事をする
薬をのむ
話す、笑う、涙が出る
走る、愛する、退屈する
働く、さぼる、くしゃみをする
あなたを
抱きしめたい
それらすべてが日常だ

ポジティブであろうと、なかろうと
私たちはいま
エイズの時代を生きている
恐怖と不安
裏切りと和解
勇気、はったり、ごまかし
愛
ささやかな友情
それもまた、平凡にして混沌たる
21 世紀初頭の日常の一部である

人は常に前向きな日々を送っているわけではない
そんな事はしたいと思ってもできない
HIV というウイルスに感染していようと、いまいと
ポジティブであろうがなかろうが
そうした事情に変わりはない
ひたすら前向きであれと求めることの
ある種の不当さ
その大いなる錯誤の中で
私はかすかに自らを恥じ
そして、小さく伝えられるものなら
付け加えておきたい
前向きであろうと、なかろうと
私たちはあなたです

東京・神宮前の国連大学ビル2階にある UN ギャラリーでは、2003年9月19日から10月18日までの1カ月間、HIVに感染して生きる人たち、エイズに影響を受けた人たちの日常をとらえた国際写真展「ポジティブ・ライブズ」が開かれた⁸⁾。日本の菊池 修氏をはじめ世界の第一線の報道写真家がそれぞれの国の HIV 陽性者、陽性者を支える人々を撮影したその写真展の案内には次のように書かれていた。

《写真家たちがとらえることができたのは、エイズとの困難な闘いを続ける人々の日常のほんの一部のそのまた一瞬に過ぎません。だからこそ私たちは、その一瞬の多様さをできるだけ多くの人に体験してもらいたいと考えました》

詩のタイトル「前向きであろうと、なかろうと」はその写真展のキャッチコピーでもある。特定非営利活動法人エイズ&ソサエティ研究会がその前年、ポジティブ・ライブズの作品40点を全国で巡回展示する小さな写真展を企画し、私もささやかなお手伝いのつもりで「私たちは、あなたです」というコピーを作った。

《いま私たちが生きているこの社会には HIV に感染している人も、していない人もいて一緒に暮らしている。感染していない人が「私たち」で、感染している人は「あなた」。そのような区分はまったく意味を持たない。アジアの5カ国の HIV コミュニティの姿を伝える40点の写真を通して、そのささやかな事実にも納得してもらえないのではいか》

そう考えたからだ。UN ギャラリーの写真展ではこのコピーを踏まえ、「前向きであろうと、なかろうと」というテーマを用意した。

《えっ、と思われるかもしれませんが。前向きでなくても

いいの。確かに「ポジティブ」は HIV 検査の陽性を表すと同時に、「前向き」とか「積極的に」といった意味ももっています。しかし、私たちはいま、前向きに生きることばかりをメッセージとして掲げる必要はないという逆説的メッセージをあえて伝えることで、エイズの時代の現実にもう一段、深く踏み込んでいくことにしました》

写真展からすでに10年、「私たちが生きているこの社会には HIV に感染している人も、していない人も一緒に暮らしている」という認識は2004年9月に始まった Living Together というプロジェクトのコンセプトとも共通している。風の噂では、「私たちはあなたです」というフレーズが実は Living Together のヒントになったという話も聞く。部分的にせよ、それが本当だとすれば、コピー冥利につきるというべきだろう。

4. 長期的対応への移行

冒頭で紹介したピーター・ピオット氏は昨年11月24日午後、横浜市港北区の慶應義塾大学日吉キャンパスで開かれた第26回日本エイズ学会学術集会・総会で講演し「エイズはもう終わったというような発想があるが、終わりが近いと考えるのは間違いである」と重ねて警告している。

その4日前の11月20日にUNAIDSが発表した最新推計をもとに世界の HIV/エイズの現状を見ていこう⁹⁾。

HIV 陽性者数 3,400 万人 (3,140~3,590 万人)
年間新規 HIV 感染者数 250 万人 (220~280 万人)
エイズ関連の年間死者数 170 万人 (150~190 万人)
途上国で抗レトロウイルス治療を受けている人の数 800 万人

年間の新規感染は2001年当時と比べると70万人の減。年間死者数も2005年当時より50万人以上減っているという。それでも HIV の新規感染は1日平均7,000人にもなる。予防対策と治療の普及の成果で新規感染も死者数も減少傾向を示しているとはいえ、「終わりが見えた」というにはまだほど遠い状態だ。

治療の普及に関していえば、世界保健機関 (WHO) と UNAIDS が提唱した 3by5 (2005 年末までに 300 万人に治療のアクセスを確保する) 計画が 2003 年 12 月にスタートした時点で治療を受けることができた途上国の HIV 陽性者は 40 万人とされていた。治療へのアクセスは 8 年間で 20 倍に拡大したことになる。

これは輝かしい成果ではあるが、途上国で抗レトロウイルス治療を緊急に必要とする HIV 陽性者数は 2011 年時点で約 1,500 万人と推計されており、いまなお必要な治療を受けられない人が 700 万人もいる。すでに治療を開始した

800 万人が安定的に治療を続け、さらに 700 万人が新たに治療を開始するだけでも並大抵のことではない。

なおかつ現在の HIV 陽性者数が 3,400 万人ということは、かりにいまから新たに感染する人がまったくいなくなったとしても、治療が必要な人は今後どんどん増えていくということでもある。

一方で、世界のエイズ対策資金は 2001 年以降、大きく増え 2011 年には 168 億ドルに達したということだが、国際的な経済危機の影響で最近では先進諸国からの国際的資金拠出も頭打ちからやや減少の傾向になっている。「終わりの始まりを目指す」という決意表明はありえたとしても、治療の進歩で終わりが見えてきたというような楽観論に依拠して「予防としての治療」にのみ過度な期待をかけるのは間違いだろう。

ピオット氏は日本エイズ学会の講演のなかで「エイズの流行はいまも世界が真剣に対応すべきパンデミックである」と指摘し、(1) 保健分野だけでなく広い視野で政治や政策をとらえる必要がある、(2) セックスやドラッグと関連した社会的な偏見や差別への対応が予防や治療の普及を進めていくうえでも重要な意味を持っている、(3) ゲイコミュニティから始まったアクティビズムがエイズ対策を進めていく大きな原動力になってきた、と強調した。そして「現状は終わりの始まりなどといえる状態ではなく、日本のキャンペーンテーマで指摘されているように AIDS Goes on と考えるのが正しいだろう。エイズとの闘いは今後、短期的な危機への対応から、長期の継続的対応へと移っていかねばならない」との認識を示し、講演を締めくくっている¹⁰⁾。

30 年を超えるエイズ対策の歴史の全体像を把握するこ

とは容易なことではない。本稿は 1994 年を一つの節目としてとらえ、そのころたまたまエイズの流行に深刻な影響を受けていたニューヨークという町で、一人の日本人記者が何を見て、聞いて、考えていたかといった類いの話を大きく超えるものではないが、いまとなつては想像することにも困難な当時の雰囲気や議論の一端を伝える助けにはなるかもしれない。これからのエイズ対策を担う人たちの参考にしていただければ幸いである。

文 献

- 1) NO TIME TO LOSE (W.W.NORTON&COMPANY). p375.
- 2) <http://www.ca-aids.jp/theme/> (コミュニティアクション 2012 キャンペーンテーマ)
- 3) 産経新聞 1994 年 6 月 27 日夕刊.
- 4) 産経新聞 1994 年 7 月 26 日夕刊.
- 5) <http://www.unaids.org/en/aboutunaids/unaidscosponsors/> (UNAIDS Cosponsors).
- 6) http://data.unaids.org/pub/externaldocument/2007/the-paris-declaration_en.pdf (The Paris Declaration).
- 7) <http://www.actupny.org/> (AIDS Coalition to Unleash Power New York).
- 8) http://www.unic.or.jp/gallery/pdf/positive_a.pdf (ポジティブ・ライブズ写真展チラシ表).
http://www.unic.or.jp/gallery/pdf/positive_b.pdf (ポジティブ・ライブズ写真展チラシ裏).
- 9) http://asajp.at.webry.info/201211/article_4.html (HAT プロジェクト 2012 年世界エイズデー UNAIDS 報告書「Results」プレスリリース).
- 10) http://asajp.at.webry.info/201211/article_5.html (TOP-HAT News 51 号).